

心理学理論における死と宗教

—宗教の愛着理論—

イーリヤ・ムスリン

愛着理論(Attachment theory, 以下 AT とも)は臨床と発達心理学の分野にルーツを持つ、パーソナリティや精神発達、人間関係についての理論である。発足以来、既に 1 万以上の書籍や論文が執筆され、幅広いテーマを扱いながら発達・社会・臨床心理学及び教育の分野に多大な影響を与えているほか、90 年代に入ってから宗教の研究にも大きなインパクトを与えている。本稿では AT における宗教の捉え方や死と宗教の関係を考察し、この学派の宗教に対する研究アプローチと結果における問題点を指摘することを主な目的とする。

本稿は、死に関する宗教信仰と個人や社会における死に対する感情・認識の関係、宗教成立過程における死の位置、死関連の信仰が宗教の存続と維持において果たす役割などといった問題を扱う心理学理論に注目する筆者の研究の一環である。

これら本稿の課題に際して、宗教の多様性を重視し、研究者の宗教概念を問いながら自文化中心的態度を戒める宗教学的な立場から取り組みたい。

1. 愛着理論の概要

愛着理論を提示したのは、孤児院もしくは病院に入って親の保護を離れた幼児を観察していたイギリスの臨床心理学者 J. ボウルビーである⁽¹⁾。もともと精神分析学に携わったが、死や病気によって親から引き離された子供の行動や感情は、精神分析では説明しきれないという結論に達し、愛着理論を提唱する。動物行動学や進化論の視点などを子供の行動の研究に導入し、人間は動物と同様、「愛着システム」という行動的・認知的・感情的システムを備えていると主張した。それは食糧摂取やセックスに関する行動を司るシステムと異なり、独立したものであると考えたのである。

愛着システムとは、子供と養育者・保護者(大抵の場合、親にあたる)が互いに離れないよう、子供と養育者の近接性を維持するための行動を司るシステムで、無防備な乳幼児を守り、その生存率を高めることが主な役割・機能である。それは自然淘汰によって発達したものであり、人間以外の種にも存在するという。ボウルビーは、愛着システムの稼働や中止の条件を研究し、成長して大人になっても愛着システムが働き続けると考えた⁽²⁾。ただし、大人は子供より自律性が高く、身を守る際には、養育者を当てにすることしかできない子供に比べて多くの選択肢をも

つ。そのため、大人は愛着システムが作動する回数が子供より少なく、愛着の質に関しても、親との物理的な近接性を必要とせず、出会いを子供ほど求めない（写真や電話などを通した絆の維持で十分とする）傾向がある。また、小さな子供の場合は愛着の対象となるのが親ないしそれに代わる養育者であるのに対し、年長の子供や大人においては、愛着対象者が同世代の仲間や先生、恋人などになることが多い。

ここで指摘すべきは、愛着理論のなかでは、愛着関係の条件が定義されており、すべての親しい関係が愛着関係とはならないことである。まず愛着とは、自分より強力な知恵を備え、保護と安全感を供給できると見なされる人物に対しての強い認知的・情緒的な絆である。加えて、愛着理論に関する著述では、愛着関係の必要条件が挙げられている。（物理的または心理的な）近接性の追求と維持（保護や絆を求める側と保護を提供する側、愛着対象者が互いの近接性を維持すること）、安全な避難所の提供（トラブルやストレスの発生時に愛着対象者が安心感・慰め・精神的サポートを提供すること）、そして安全基地の提供（安全や安心感を求める側が自信を持って探求や成長を達成できるように、愛着対象が物理的、あるいは心理的に安全な出発点・拠点を提供すること）である。また、人が愛着対象との分離を恐れ、愛着対象者が亡くなった際に喪失感を抱いて悲嘆に包まれることも愛着関係の特徴となる⁽³⁾。

愛着システムは全人類に普遍的であるが⁽⁴⁾、かといって均等なものではない。つまり、養育者や恋人との対人関係の経験によって個人差が生まれる。愛着様式は、安定型と不安定型の大きく2つに分けることができる。不安定型はさらに、子供については抵抗・両価型と回避型⁽⁵⁾、成人においては不安・両価（アンビヴァレント）型と回避型に細分化される⁽⁶⁾。近年、多くの論者はもうひとつの類型として無秩序・無方向（混乱）型を導入している⁽⁷⁾。具体的にはたとえば、安定型の人には、自分のニーズに合わせた質のよいケアを受け、面倒見のよい養育者に恵まれる。それ故、他者を信頼し、人との密接な関係を築くのを躊躇せず、自己を他人の世話に任せることに対して不安がない一方、人の世話をすることも好み、かつ自分の力や能力に対して自信を持つタイプである。

2. 愛着理論における宗教

2.1 愛着理論における宗教概念と主な研究関心

愛着理論が宗教に応用されるのは、L. A. カークパトリック、P. グランクヴィスト、M. ミクリンサー、F. フロリアン、P. R. シェイバーなどの研究においてである⁽⁸⁾。これらの論者は、養育者と恋人への愛着スタイルが宗教認識あるいは宗教性に与える影響に焦点を当てる。具体的には、愛着スタイルと信仰の有無や特徴、入信との間の関係がいかなるものであるかを中心的なテーマとしている。

こうした論者によると、宗教とは「超自然的、神秘的、畏怖の念を起こさせるものに対する個人の信念・価値・行動」であり⁽⁹⁾、一部の宗教的認識の根底を成しているのが愛着システムである。そこでは「愛着システムの認知的・情緒的な仕組みが、神及び神的存在についての思考の深層構造ないし普遍的文法を提供している」ことが提唱される⁽¹⁰⁾。具体的には、幼少期の両親

との経験が、子供において内面化され、全般的な人間ないし人間関係についての一般論に塗り替えられていき、神のような、目にみえない、人格のある存在にも投影されるという。

愛着論者が主張するのは、信者の神（人格神）との関係が「代替愛着」⁽¹¹⁾あるいは「象徴的愛着」⁽¹²⁾であり、神が代替愛着対象として機能する⁽¹³⁾ということである。そしてキリスト教の神とは、「完全に相応しい愛着対象」⁽¹⁴⁾（「理想的な愛着対象者」⁽¹⁵⁾、「究極の愛着対象者」⁽¹⁶⁾）であるとされる。何故なら、神は全知全能と信奉され、究極の強者かつ賢者として捉えられるのみならず、無条件または明確な条件をもつ愛や安全な避難所と安全の基地を提供する、常にアクセス可能な存在であり、信者は礼拝や祈り、（絵、彫刻のような）像やお守りなどを通して神との接近を求めているからである⁽¹⁷⁾。

さらに、信者と神との関係を愛着関係とみなす場合には、もうひとつ条件が加えられる。それは、認知的信念（信仰）のほかに、感情的な絆が存在すること（例えば、神を愛し、神に愛されていると感じること）である。そのような絆を感じず、何らかの社会的・経済的利益のために儀礼を行ったり、礼拝したりする者の神との関係は、愛着関係ではなく、むしろ交換関係に該当すると考えられる⁽¹⁸⁾。

愛着理論は関係や関係性に関する理論であり、前述の研究者はこれまで、主として信者と人格を持つとされる超自然的な存在との間の関係に焦点をあて、キリスト教やユダヤ教といった一神教を中心的に取り上げてきた。ATの複数の文献においては、愛着理論は宗教全般ではなく、宗教における関係性のみに関する理論であり、愛着理論で説明しうるのは信者の人格神への信仰や関係であって、その研究は一神教の文化圏でしか取り込まれていないというような理論の範囲と有効性に関する限定的な発言が見られる⁽¹⁹⁾。だがここ数年、ニュー・エイジ信仰に関する研究も登場しており、理論の範囲を拡張する動きも見られる⁽²⁰⁾。

2.2 研究方法

愛着様式と宗教信仰の関係を把握し、神の安全な避難所と安全基地としての機能などを確かめるため、愛着論者は宗教者による著作の分析のほかに実証研究を進めており、調査対象者の養育者や神との愛着形態を特定するための自己報告型質問紙やインタビュー（「成人愛着面接」）、（様々な言葉を映した映像を速い速度で見せるなど）意識下の刺激を与えた実験が行われている。より具体的には、調査の対象者に、その愛着様式を把握するべく、幼少期における両親との関係や親像などを問う自己報告質問票を記入させたり、20問からなる面接の後に、対象者の信仰の性質を特定するための尺度を記入させ、愛着様式と信仰の相関性を数学的に求める、というような形式が多い。対象者の愛着様式をもとに、対象者の将来の宗教性や入信の可能性を予測した場合は、数年後にフォローアップ調査を実施するというように、縦断的研究を行うこともある。加えて、そもそも神との愛着関係は観念的かつ経験的に（神像、教理的正当性の程度、宗教的指向性など）ほかの宗教性の側面と区別することができ、実際、単独で特定の心理的な効果・状態を導くことができるのかという点も経験的に確かめるべき問題として扱われ、厳格な統計学的手法

に基づいた調査を実施するなど、神との愛着関係の实在の確認と、概念的・分析的道具としての有効性の確認も取り組まれている⁽²¹⁾。

2.3 ATによる宗教調査の結果

この種の宗教研究がこれまで活発に行われてきたのは、アメリカ、スウェーデン、そしてイスラエルである。それらの調査では、次のような結果が示される。

まず、宗教の AT が大きく取り上げる問題として、養育者との愛着様式が個人の宗教受容や意識、また世代間宗教伝達に及ぼす影響がある。カークパトリックは、宗教を受け入れる人間の人格と動機に関する相違を説明するため、ボウルビーが想定した「内的作業モデル」という認知的モデルに依拠しつつ、「一致」(correspondence)と「補償」(compensation)という2つの仮説を立て、それらを自ら、あるいは共同で検証する調査を行っている⁽²²⁾。それによれば、人は養育者との愛着関係の経験をもとに、自己及び他者に対するイメージと期待を含む「内的作業モデル」を発達させるが、それによって人や神の像、またそれとの愛着関係が決定されるという。カークパトリックによると、入信するのには主に2つの道がある。すなわち、自己を他者の保護やケアに値する者として基本的にポジティブに評価し、他者を基本的に信頼に値する者として捉える安定型の方は、そのポジティブなイメージを自らの宗教の捉え方にも反映させ、信仰対象と安定した愛着関係を結ぶ(養育者との愛着関係と、神との愛着関係との一致)。よって、安定型の方はそうでない者より宗教を信じる傾向がある。入信をする際も、たいていの場合、大きな感情的な噴出なしに穏やかに進み、神を人々のケアを引き受ける善意の愛と許しの存在として捉え、なおかつ親の宗教を受け継ぐ傾向が見られる。

これに対し、不安定型の方は、全体的に安定型より宗教を避ける(無神論者もしくは不可知論者になる)傾向があり、信仰を抱いても、それは多くの場合、親(養育者)と異なる宗教となる。不安定型に関してより詳しく見るなら、自己の価値を疑い、他者を時には暖かい、時には冷たく読みづらい存在として捉えがちな(不安定型の一種である)不安・両価型は、保育者の思想や価値観を拒絶しがちである。ただし、保育者が肯定する以外の宗教のなかで面倒見のよさそうな師匠、あるいはそのような性格の超自然的存在に出会った場合には、養育者との関係に欠けていた愛情を補おうとして、養育者と異なる宗教信仰を抱くことがしばしばである(補償)。このタイプは、宗教に関心を抱く場合、入信が突発的に感情的かつ劇的に行われる傾向があり、神を、時に愛情やサポートを提供し、時に罰を与え、怒れる存在として見なしがちである。

自己を十分肯定的に考えるも、他者をあまり信頼できない(不安型の中のもうひとつのタイプ)回避型は、自立や自給自足に対する意識が強く、宗教に惹かれることは比較的少ないが、信仰を抱いた場合は、神を生活に直接関わらない遠い存在として考える傾向がある。一方、幼少期に養育者との関係において深刻なトラウマを経験し、それによって他者との接触において認知的な混乱に陥りがちな無秩序・無方向型に関しては、テレパシーやオカルトなどの原則として愛着対象者が不在の信仰を選択する傾向がある⁽²³⁾。

ATの研究では、成人期における愛着と宗教に関するについても議論されている。恋人を持たない人は、持つ人よりも積極的に宗教に関わり、信仰対象と密接な私的関係を築く傾向にあるとい

う⁽²⁴⁾。不安定型の人は、恋人との関係が充実している場合は宗教から遠ざかるが、うまく行かない場合には宗教（信仰対象）に愛情を求める傾向があり、神との愛着関係において愛を与えられたことによって自己評価を高め、自信を得ることがあるなどの研究結果が発表されている⁽²⁵⁾。

つまり端的に述べるならば、神像や神との愛着関係における個人差は、養育者及び恋人との関係、すなわち愛着スタイル（様式）に拠っており、神像はとりわけ第一養育者（主に母親）像に類似しているということになる⁽²⁶⁾。

さらに AT 論者によれば、宗教調査においては、神が実際に愛着対象者、すなわち安全な避難所と安全基地として機能していることが（対象者を不安にさせ、神への信仰の不安緩和効果を観察するなどの研究によって）確認されているという。こうした安全な避難所と安全基地としての神の機能は、基本的に不安定型よりも安定型において顕著に見られる⁽²⁷⁾。また神に対する愛着は、ほかの宗教性の次元よりも心理的に良好な状態をもたらすという結果も指摘される⁽²⁸⁾。それ故、AT 論者は「宗教は少なくとも部分的に保護と安全感への欲求に根源を持つようである」こと⁽²⁹⁾、神が不安と恐怖の解毒剤として機能するはずであるとの仮説を証明した実証研究が存在することを主張して⁽³⁰⁾、不安緩衝が宗教の中心的な特徴として捉えられる。そこでは、神や天使などの超自然的な存在が安全な避難所や安全基地として機能していることも指摘されており、信者における不安や孤独の緩和、生活における規律、人生の目標や意味を提供する機能など、宗教の精神的・肉体的健康へのポジティブな効果が強調される傾向にある。

ところで、AT 論者の間では近年、一神教以外の宗教形態も対象に含め、宗教の愛着理論の範囲を拡張する動きが登場しており、とりわけニュー・エイジ・スピリチュアリティが着目される。それによると、ニュー・エイジとは、密教やオカルト、占星術や超常心理現象、対外離脱・臨死体験などに関する信仰や人間性心理学に由来するスピリチュアリティを含むが、これらの諸形態の共通点は、一神教の神のような愛着対象の不在であるという。そしてニュー・エイジ思想は、むしろ自己というものを祝福し、神ではなく「形而上学的な自己を思想の中心に」据える⁽³¹⁾。

こうした側面から、AT 研究は、ニュー・エイジ信仰に繋がるのは、無秩序型及び不安・両価型の愛着スタイルであると論じる。愛着対象に肉体的虐待や口頭暴力を受けた子供は、時には不安緩和の提供者であり、時には脅威である愛着対象者に対し、どのような態度を取るべきかについて迷う。そのため、実験では、保育者に近づこうとしながらも、その前で不安げに静止・麻痺するなどの矛盾的な動作を示す傾向があるが、このような定まりのない愛着関係と精神的に未解決であるトラウマがもたらす相反した感情は、愛着からの逃避、あるいは自己分離的精神状態及び自己分離的信仰に結びつく。占星術のように自分の運命を自己の能力と切り離して考える、瀕死体験にあるように魂が自体を物理的に離れていく、また催眠術にあるように前世の自分というもうひとつの自己と出会う、といったニュー・エイジ的信仰と実践は、まさに自我喪失や自己分離という変成意識によるものであり、無秩序・混乱型の愛着が生み出す、自己・自体・現実からの精神的な分離や空想などに吸収されやすい心理的傾向によるものである⁽³²⁾。ただし AT 論者は、ニュー・エイジ的な信仰を抱くには複数の経路があるため、この種のスピリチュアリティの背景にあるすべての動機を愛着理論のみでは説明できないとしている。トラウマを解決できな

かった無秩序・混乱型でも建設的であり得る場合があり、ニュー・エイジ信仰にはポジティブな精神的効果の可能性もあるという⁽³³⁾。

もうひとつ、ここ十数年の愛着理論に見られる取り組みとして、進化心理学及び恐怖管理理論との融合をめざす動きがある。前者との理論的な融合は、カークパトリックとグランクヴィスト、後者との結びつきはミクリンサーとフロリアンの研究で進められている。そのうち、進化心理学の宗教論を全面的に受け入れたカークパトリックは、愛着システムが、生存と生殖（遺伝子伝達）を確保するように機能する、自然淘汰によって発達した多数の心理的メカニズム（システム）のひとつに過ぎないと考える。宗教の包括的な理解を実現するのであれば、すべての心理的メカニズムの働きを視野に入れ、中間レベルの理論である宗教の愛着理論を、進化心理学という広いメタ理論の枠組みのなかに組み込む必要があるという⁽³⁴⁾。（愛着理論と恐怖管理理論の融合については、次節で扱う。）

3. 愛着理論における死

ボウルビーは『対象喪失』⁽³⁵⁾で一般的な人間恐怖について議論し、そのなかで子供の死に対する恐怖に触れる。それによると、子供においてその恐怖は、包括的で抽象的な死への恐怖としてではなく、急な音、見知らぬ人、動物や暗闇に対する具体的な対象への恐怖として表れてくる。また、子供の不登校や引き籠りの要因としての親の言動という文脈の中で、引きこもりがちな子供が親の死、さらには、自分の死に対して抱く恐怖についても論じる。（具体的には、子供はどのような親の言動によって親との分離、親に見捨てられることに対する恐怖を抱き、親の怪我や死、また親に置き去りにされることを警戒し、家を離れたくない気持ちを抱くかが分析される）⁽³⁶⁾。

同書は、子供と大人における、親、配偶者、子供といった大切な他者の死に対する対処と愛着スタイルの関係を分析する。具体的には、死への反応の背景にある情緒や防衛機制、悲嘆における認知的・情緒的個人差、健康的・病原的コーピング（死別への対処）の特徴、病原的なコーピングになりがちな資質などを特定しようとした。

ボウルビーは同書のなかで、愛する者の死は驚きと、亡き者が死後も存在し続けているという感覚、また悲しみや怒りを伴うという意見を提示し、文化人類学の文献を短く分析した後に、自身の見解が他文化に関する研究においても裏付けられていることを主張する。死者が死後にも生き続け、生者と関係を持ち続けるという信仰と、死体を処理する儀礼はすべての文化にみられる。葬儀儀礼には極めて多様な形が存在するにもかかわらず、すべての葬儀儀礼は、1. 死者との継続的な関係を前提とし、その関係の維持のしかたを決定する、2. 死別によって置き去りにされたことへの怒りを表現する形、また死の責任を誰に負わせるかを規定する、3. 悲嘆の終了時点を規定する、という共通点をもつという⁽³⁷⁾。

ボウルビーによると、死者に関する様々な文化的パターンの背景には全人類共通の大切な他者への心理的反応がある。さらに、あらゆる文化の人間は、自らの死後に関する意識的な信仰の有無にもかかわらず、「亡き者との関係を持ち続けたいという強い唱導」⁽³⁸⁾を持っている。ボウ

ルビーの考えでは、死後の世界に対する宗教信仰が諸文化において存在することは、死者との近接性を維持したい心理的な衝動で説明しうる。

もっとも、ボウルビーの死への不安・恐怖に対する関心は、あくまでも研究の主題である幼児と養育者の愛着関係の性質、第一養育者の無関心で鈍感なケアがもたらす病原的な影響、精神的動揺の治療方法などの問題に限られる。他者の死は分離不安という文脈の中で捉えられており、死と宗教というテーマがその研究において重要な位置を占めているわけではない。

愛着スタイルや経験が宗教性（人の宗教心）に及ぼす影響、また愛着と死への不安の間の関係という問題を大きく取り上げるのは、L. A. カークパトリック、P. グランクヴィスト、M. ミクリンサー、V. フロリアンなどの研究である。これらの論者は、ボウルビーの基本路線を引き継ぎ、死とは究極の分離であり、子供の死のイメージに見られるように死に対する意識は分離に対する意識と関係していると考え⁽³⁹⁾。そして大切な他者の死（愛着対象者との死別）も自己死も、分離というプリズムを通して捉える傾向がある⁽⁴⁰⁾。またボウルビーと同様、人間愛着対象者の喪失によって精神的動揺や悲嘆が生じるとともに愛着システムが稼働し、近接性を求める反応も起きることを指摘する。そのため、信仰を持つ人においては、消滅することがなく、常にアクセスが可能だという意味で人間より頼もしい愛着対象者である神に以前より縋る傾向が、信仰を持たない一部の人においては、死者の代替となる愛着対象としての神に傾倒する傾向がそれぞれ見られるというように、大切な他者の死に伴って宗教性が増大する現象が説明できるという⁽⁴¹⁾。

ボウルビー以後の愛着理論における死と宗教の関係に関する研究として代表的なものは、ミクリンサーとフロリアン及びその同僚が手掛けた研究である。ここでは、愛着様式が能力・自尊心などに影響を及ぼすことが着目され、愛着の安定・不安定によって、人々の人生諸問題に対する態度や対応方法のみならず、死関連の諸問題に対する態度も影響されるという仮説が提示される。安定型の人はそのでない人より、自らの能力に関する自信があり、孤独感を感じることが少なく、人を信頼する。故に、それだけ分離不安に強く、ネガティブな感情の処理がより巧みであると想定され、死の不安が比較的少ないと考えられる。

これらの推測・仮説を証明するべく、上記の論者は実証研究を行うが、その結果は、仮説の通り、子供のころに築かれた愛着スタイルは死の不安の管理に関係するというものであった。より具体的には、安定型の人是不安定型より死の不安が少なく、死を想起させる刺激に対しては、人との親密性を求め、死を有意義で自分には対応できるものとして捉えるなど、精神的な成長に繋がる形で反応する点が確認されている。（その反面、不安定型の人は、死の不安を管理するのが難しく、人との近接性を求めることなく、その不安に無人格的な防衛規制で対応することを試みたりする⁽⁴²⁾。）

加えて以上の研究は、大人の恋愛関係も死の不安を緩和する（不安緩衝としての）機能があると指摘する⁽⁴³⁾。AT 論者は一連の研究を通して、密接な関係や愛着スタイルという視点から、文化的世界観と自尊心の、死の恐怖に対する緩衝機能を主張する恐怖管理理論を吟味した。この結果、世界観と自尊心以外にも密接な恋愛関係が死の恐怖管理に関わっていることを結論づけ、

愛着理論と恐怖理論の融合を提案している。たとえば、ミクリンサー、フロリアン、シェーバーなどは、恋人との恋愛関係が、生存の確保、生殖や育児という点で重要な生物学的な機能を果たし、生存と生殖を困難にする個人の物理的な孤立を防ぐほか、精神的動揺の際に不安緩衝としても機能することを挙げ、こうした愛着関係は死の不安も緩和するはずであると仮定する。実際、その仮説の検証を行った複数の調査では、自尊心を傷つけられ、世界観を批判された状態においても（つまり、恐怖管理理論が死に対する無意識な遠位防衛機制と考えるものが脅かされ、破られそうになった場合でも）、恋愛関係を想起させられる場合は被験者の死の不安が減少することが示される。恋愛関係は自尊心や世界観の確立を促し得るものだが、この調査は、そうした密接な人間関係が、自尊心の取得・増大あるいは世界観の維持・強化という回路を通じて働くのではなく、この関係自体が単独で直接的に死の不安の緩和をもたらすことを主張する。この点を踏まえ、AT 論者は、自尊心と文化的世界観という恐怖管理理論における 2 つの中心的な柱に、密接な人間関係という三つ目の死の不安緩衝に関する要素を加えることを提起しており、恐怖管理理論の改善を促している⁽⁴⁴⁾。

4. 本研究における評価

宗教の愛着理論は、人間関係と人格の宗教意識への影響、信仰の動機、信仰対象の像や入信過程における個人差、宗教の世代間伝達、宗教の精神健康への影響など、比較的幅広い問題を取り上げる。その議論は今なお発達途上であり、実証調査によって日々正確で精緻なものになりつつある。宗教に関して言えば、愛着理論は、愛着スタイルや養育者・恋人との関係にみられる経験と宗教信仰の性質に関して多くの具体的な仮説を行い、自己報告型質問紙・インタビュー・意識下に刺激を与える実験など、多様な測定・研究方法によって丁寧に仮説の実証に取り組んでいる。

また愛着理論は、宗教に対する態度、信仰内容、信仰対象との関係、入信プロセスなどにおける個人差について重要な洞察や予測を提示し、家族（家庭内）の宗教伝達を説明する。人の宗教性は養育者との愛着関係によって予測可能であることを証明し、個人の人生経験や人格と宗教性の間の相関関係についての理解に一定の貢献を成している。恋愛関係における愛着スタイルと宗教性に関する研究も興味深く、注目に値するものである。しかし、以下ではいくつかの問題点を指摘しておく必要もあるだろう。

まず、人間同士の愛着関係を宗教の世界にどこまで拡張できるかという問題が挙げられる。AT は信者における神との近接性追求、神の安全基地と安全な避難所としての心理的な機能について説得的に論じ、実証研究による確認も積み重ねている。だが、D. M. ウルフが論じるように、宗教においては、AT によって比較的説明が容易な親と子、師匠と弟子の関係以外にも、友人同士あるいは配偶者同士の（力や知恵の差異がより小さく、比較的平等な）関係を示唆する交流が見られるため、AT を宗教に応用する際の範囲を拡張しすぎないように留意する必要があるだろう。ウルフはさらに、安定型の人は親の宗教を受け継ぐ傾向があるという愛着理論の主張に対して次のように述べる。そもそも養育者が安全な基地として子供が未知の世界を探求することを可能にし、養育者と安定した絆を持つ子供がそうした探求に必要な自信や自立能力を特に備えているなら、

安定型の人が様々な宗教を探求することなく、親の信仰にとどまる傾向があるという AT の主張は議論が不十分であり、このこと自体が、愛着理論のモデルを宗教に応用すべきでないことを示すかもしれない⁽⁴⁵⁾。

次に、AT 理論ではその有効範囲が西洋一神教あるいは人格神を纏わる宗教のみに限られ、全般的な宗教の包括的な理論を示すことは目的ではないことが述べられる。だが一方で、愛着理論が一神教のみならず、他の宗教形態にも（多神教にも、また西洋では一般に無神教として捉えられがちな仏教にも人格神が見られるという理由で同様に）重要な手がかりを提供するとも主張される⁽⁴⁶⁾。確かに、人格神との関係を中心に置く理論は、キリスト教あるいは一神教に留まらず、より広い範囲で他の宗教にも何らかの洞察を提供しうる。だがここで問題なのは、AT が全般的な宗教の理論に近いものを提供することを事実上試みているにもかかわらず、「全般的な宗教の包括的な理論を目指していない」と繰り返し断ることによって、提示された理論が晒され得る自文化中心性についての批判をまともに受けようとしまいことである。仮に宗教の愛着理論が、一神教以外の宗教形態への応用の可能性を確かめるのであれば、イスラム教や多神教などのような文化的文脈においても調査を実施する必要がある。しかし AT 論者自身が認めているように、この理論の枠組みを用いた宗教研究は、北米と北欧、イスラエルに限られており、非西洋のあるいは非一神教の文化的文脈では行われていない⁽⁴⁷⁾。それ故、この理論の前提や有効性をより多様な宗教的コンテクストにおいて試みる必要がある。

また、ボウルビーが主張する普遍的な「死者との近接性を維持したいという強い心理的唱導」について言えば、宗教にしばしば見られる死体回避、死による穢れ、不運で危険な存在としての死者のイメージを説明する上で有効的ではない。人間の愛着対象を失った後に、「特に魅力的で貴重な代替の愛着対象としてみなされる」神に縋り⁽⁴⁸⁾、それによって宗教性が深まるという議論に関しても、たとえば、大切な他者を無くし、神に失望して信仰を失ったというような現象を捉えきれず、必然性を欠いているように思われる。

さらに、AT 論者が、人格神との関係としての宗教が、安全な避難所と安全基地としての機能を持つという議論を提示する際、その裏付けとして引き合いに出されるのは、信者における比較的 low レベルの不安や効果的な不安への対応、罪悪感の欠如、自分の能力に関する自信や自尊心、人への信頼度の高さなど、精神健康へのポジティブな効果を示す研究である⁽⁴⁹⁾。しかし、不治病や大切な他者の喪失といった逆境に遭遇した場合の罪悪感の増大、宗教に対する疑問、自尊心の低下や自信の喪失などを指摘する研究にはあまり触れない。たとえば、グランクヴィストとカークパトリックは、「宗教と精神健康ないし幸福との繋がりは甚だ複雑で多面的である」ことを述べつつ、結局のところ、神への愛着がもたらす心的利益の証拠が提示されるのみである⁽⁵⁰⁾。だが、不治病に見舞われた人において、信仰を持つ者のほうが持たない者より、（神に裏切られた、または見捨てられた、という信者特殊的な悩みのために）自尊心が損なわれやすく、鬱病になりやすいという結果を示す研究もある⁽⁵¹⁾。持病や不治病を抱える患者に関しては、宗教的な悩みを抱いた信者のほうが信仰を持たない者より死亡率が高いという結果を提示する調査さえある⁽⁵²⁾。

愛着論者として研究キャリアをはじめ、後に進化心理学の議論を全面的に取り入れたカークパトリックは、その重要な著書『愛着、進化と宗教心理学』⁽⁵³⁾において、愛着システムは宗教を支える多数の心理的メカニズムのひとつでしかないと述べる。そして、宗教をひとつのメカニズムのみに還元することはできず、神との関係は愛着関係に限定されないのであって、神に対する信者の怒りや失望は、愛着関係よりも神との交換関係によって説明しようと主張する。信者は神に信仰や祈祷・贈り物などを捧げ、その見返りとして正義や加護を期待するが、これは一種の互惠性概念に基づいた社会的交換関係であり、契約のようなものである。すなわち信者は、身内を亡くしたあるいは重病を抱えた時に契約を一方的に侵害され、神に裏切られたと感じるために怒りや失望感を抱くという。しかし、危機において神との近接性を求める信者が、近接性を拒否されたと感じ、「神に見捨てられた」「置き去りにされた」などの失望感を抱くといった愛着関係に基づいた解釈も十分可能であり、交換関係であるとする必然性はないだろう。ATの著書は（地獄へ落ちることによって神と永遠に別れるのではないかといった）神との不安分離に関して言及するものの⁽⁵⁴⁾、愛着様式と背信、神との関係に関する不安や疑問の相関性についての調査をあまり行っておらず、宗教の愛着理論がもつ可能性が十分に開拓されているわけではない。

この点に関して筆者は、信者がイメージした神との理想的な関係と現実の間の不調和が生み出す信者の精神的不健康も愛着理論によって説明可能であると考え。たとえばAT論者の見解において、安定型の人には神を、面倒を見てくれる許しや愛の存在として見なす傾向がある一方、不安・両価型は罰を与え、怒りうる存在として、回避型は直接生活に関わらない遠い存在として見なす傾向をもつとされる。そして神を愛の存在として捉える人は、人生に対する満足感が比較的大きく、不安症や鬱病になることも少ないため、神経症にも比較的なりやすい不安定型の信者よりも、その精神的・肉体的健康が良好であると主張する⁽⁵⁵⁾。しかし、この種の重層的な議論、また愛着対象（神）との分離に対する不安を取り上げる議論は十分に展開されているとは言い難い。そこで強調されるのは、(キリスト教の)神が無条件の愛を提供する存在として、いかに信者に不安緩和や慰めを与え、いかに信者を良好な健康状態にするかといった、神がもつ安全避難所としての(ポジティブな)機能ばかりである。AT論者においては、宗教の多様性をよく承知していると言いながらも、「その(神との)関係において経験される情緒的な絆とは、子供と養育者の関係における愛着に類似するある種の愛であり」、「神像は敏感な養育者の特徴に類似することが多い」⁽⁵⁶⁾、「愛は宗教的信念体系、そして特に人々の神との関係の感覚において中心的な感情である」⁽⁵⁷⁾といった言及に見られるように、神を完全に善意な愛の存在として一義的に捉えがちな現代アメリカ的な見方をそのまま無反省に取り入れてしまっており、文化的な差異と歴史的な神観念の変容を軽視した姿勢が時に見受けられる。愛を宗教的信念の体系における中心的な感情とみなすことは、それ自体、宗教の不当な還元になりかねない。そうなれば、宗教の本質を依存感、畏怖畏敬の念、死への恐怖といったひとつの感情のなかに見出し、宗教の形態や表現がもつ多様性の忘却の上に成り立った、克服されたはずの単純な主情主義諸説になってしまう。

カークパトリックは、愛着関係が強い感情的な絆を意味し、神が「高められた愛着対象者」⁽⁵⁸⁾であり、信者と神の愛着関係が子供とその養育者に類似していることを強調するあまり次のように主張する。「人が神もしくはほかの宗教的对象者に愛着している場合、子供が両親を愛し、

愛されているように、あるいは恋人同士が互いを愛しているように、その愛着対象者に対して愛を感じ、対象者に愛されているという感覚を持つはずである⁽⁵⁹⁾。だがこれは、たとえば、神との愛着関係における回避型の人がもつ感情とも矛盾する。そこで想定される（カークパトリックらが研究の中で使用する「神愛着尺度」の項目のひとつである）のは、「神は一般的に、無人格で遠く、私の事情や悩みに少ししか、あるいは一切関心がないようだ。神は私にあまり興味がなく、私を好んでいないという感覚がしばしばある」といったものであった⁽⁶⁰⁾。さらに厳密に言えば、カークパトリックによる先の見解は、近接性の追求、安全な避難所、安全基地、対象者との分離へ不安、分離した後の悲痛といった、愛着関係の条件として頻繁に挙げられる基準からいささか外れているように思われる。対象者との近接性の追求、対象者との分離に対する不安などは、必ずしも愛ではなく、場合によってはむしろ依存感に支えられる可能性もあるだろう。

このような神を安全感や安心感の温かな提供者として示し、（究極の）愛着対象者として位置付けようとする AT 論者の見解は、人々の事柄に関わらない創造者のような遠い存在としても信仰されるという事実とも矛盾すると言えよう。子供と養育者の関係について AT では、養育者が鈍感または暴力的である場合、子供は愛着を撤回して（愛着システムが停止して）回避型の愛着に向かうか、あるいは認知的混乱に陥って無秩序・無方向型の愛着になるなどと議論される。カークパトリック自身も、回避型の場合、養育者が安全な避難所としても安全基地としても機能しないと述べた⁽⁶¹⁾。このことは、その養育者がもはや愛着対象者ではなくなっていることを意味するはずである。他方、超自然的な存在に関しては、神こそ安全な避難所と安全基地として機能する究極の愛着対象者ないし敏感な養育者に相当すると主張されながら、（無神論者、不可知論者になりやすい）回避型は、有神教への信仰を抱いた場合、神を人間に無関心な冷たい存在として捉えがちであるとも指摘される。だが、この「冷たい」神が愛着対象者であるか否かについては明示されない。この不明瞭さは、回避型が愛着の一種なのか、それとも非愛着なのかという理論的枠組みの曖昧さに関わる問題であるように思われる。愛着対象者でないと認めれば、理論の範囲は極めて狭くなる。逆に、愛着対象者であると主張すれば、神が安全な避難所として機能する、神との愛着関係が精神的健康や成長に繋がるといった AT の見解に制限を加える必要が出てきてしまう。

そして、魔・鬼・悪霊、邪悪な魔女など、愛やケアを一切提供しない超自然的な存在について、AT の観点からはどのように説明できるだろうか。それらの存在が愛着対象者でないとしても、そうした宗教観念が何故存在し、それを信奉する人が何故存在するのかという問題は解決されない。また、愛の神のような、安全な避難所として機能する愛着対象者を中心に据えた宗教においても、上記のような存在が教えに組み込まれている（認知的・感情的）理由を説明する必要があるだろう。

人間にとって安全な避難所として機能しない、脅迫的で邪悪な超自然的な存在が、愛着対象者になりえず、そうした存在との関係が愛着関係で説明しえないなら、愛着理論はすべての人格神への信仰とその関係を説明しておらず、（論者が適用範囲として控えめに指定した）「人格神との関係を中心とした宗教」も完全に捉えきれていないということになる。さらに、カークパトリ

ックが進化心理学の視点を取り入れつつ展開した、神は愛着対象者としてのみならず、「偉大な長」または「連合のリーダー」としても見なされる（イメージされる）という議論⁽⁶²⁾に則れば、愛着理論は、キリスト教の神という、ひとつの具体的な超自然的な存在との関係について説明しきれていないと言えるだろう。そうすると、この理論は善意な人格神、あるいは人格神の限られた一面だけを扱う、範囲の狭い理論となり、宗教の存在を人間に提供される安心感・慰めのみで説明しようとする単純な慰め型の理論になってしまいかねない。こうした問題を克服するためには、他理論との更なる融合がひとつの解決策となるように思われる。

5. 結論

愛着理論において、分離不安の要因、管理、精神的影響、他者との分離といった死の不安がもつ一つの次元、大切な他者の死に対する悲嘆やコーピングが関連する諸現象についての説明は、詳細かつ説得的であると言える。何故我々が大切な他者に死後も生き続けてほしいのか、何故我々が悲哀に暮れるのかなどに関する理解には大いに役立っている。その意味で AT は、死後の世界に対する信仰の背景にある動機について重要な視点を提供する。

しかしながら、AT は死者のネガティブなイメージを一切扱っておらず、死者が何故忌まわしく、運の悪い、邪悪で、生者に対する怒りに満ちた存在としても信仰されるかについては説明されない。あるいはより広く、生者に対して比較的中立的な存在も考慮に入れるなら、宗教の愛着理論では、愛着対象者でない死者（例えば、古い祖先）の霊に対する信仰が存在する理由、またそのような死者（霊）との関係などについて議論の対象となっていない。

宗教の愛着理論は、悪魔や悪霊などの愛着対象者でない存在、あるいはマナのような人格神でない信仰対象との関係を説明できないほか、愛を宗教の中心的な感情とし、愛の神に最大の関心を向けるが故に、人格神のすべての側面を捉えきれず、宗教的な理由による悩みや動揺、また宗教の精神健康への有害な影響といった側面も考慮されない。そのため、近年見られる理論の有効範囲を拡張する努力にもかかわらず、その射程は狭く、提唱者による「様々な宗教の側面を理解するための力強い枠組み」⁽⁶³⁾という評価についても疑問の余地が残る。

理論の射程の狭さには、AT 論者が自覚するように、愛着のみで人間のすべての動機や心理を説明することはできないという内在的な限界が挙げられる。だがそれ以外に、この理論における宗教概念は、唱道者の自覚以上に、現代アメリカ合衆国におけるキリスト教が有するような宗教観が色濃く反映されており、矛盾を孕んでいるからであると考えられる。

したがって、愛着理論の宗教と死に関する説明は、たとえ理論の範囲を、人格神を含んだ宗教のみに限定したとしても、いまだ不完全であると言わざるをえない。理論の範囲を広げ、宗教についてのより包括的で十分な理解を成し遂げるためには、自文化中心性に関するより強い意識とともに、認知科学や恐怖管理理論などの他理論との更なる融合に取り組む必要があると思われる。

註

- (1) Bowlby, J., *Attachment and Loss, Vol. 1. Attachment*, New York: Basic Books, 1969; Bowlby, J., *Attachment and Loss, Vol.2. Separation: Anxiety and Anger*, New York, Basic Books, 1973; Bowlby, J., *Attachment and Loss, Vol. 3. Loss: Sadness and Depression*, London: Pimlico 1998/1980 など参照。
- (2) Bowlby, J., *A Secure Base: Clinical Applications of Attachment Theory*, London and New York: Routledge, 2005/1988.
- (3) これらの基準はもともと M.D.S.エインスワースによって定められた。宗教のATに関しては、カークパトリックの著書などが論じている(Ainsworth, M.D.S., *Attachments across the life span, Bulletin of the New York Academy of Medicine*, 61, pp.792-812, 1985; Kirkpatrick, L.A., *Attachment, Evolution, and the Psychology of Religion*, New York, London: Guilford Press, 2005).
- (4) アメリカ, アフリカ, ヨーロッパ, アジアでの調査結果をもとに, 子供と養育者の間の愛着関係を普遍的な現象と捉え, 愛着理論の超文化的な有用性を論じるものとしてファン=エイゼンドーンとサギ=シュワーツの論文が挙げられる。Van Ijzendoorn, M.H. and A. Sagi-Schwartz, *Cross-Cultural Patterns of Attachment: Universal and Contextual Dimensions*. In Cassidy J. and P. R. Shaver (eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications* (pp.880-905), New York: Guilford, 2008.
- (5) Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E. and S. Wall, *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale: Erlbaum, 1978.
- (6) Hazan, C. and Shaver, P., Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process, *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1987, pp. 511-524.
- (7) Main, M. and Solomon, J., Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M.T. Greenberg, D. Cicchetti, and E. M. Cummings (eds.), *Attachment in the preschool years: theory, research and intervention* (pp.95-124). Chicago: University of Chicago Press, 1990. さらに, 安定型, とらわれ型, 対人恐怖回避型, 拒絶回避型というような分類を提示する研究もある(Bartholomew, K., Avoidance of intimacy: An attachment perspective, *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 1990, pp. 147-178).
- (8) なかでも L. A. カークパトリックの論文は, 愛着理論を宗教に応用した初の試みであり, 愛着理論を生かすことによって神像, 入信, 祈禱に関するそれまでの研究成果を統合することが可能であると論じた(Kirkpatrick, L. A. and Shaver, P. R., Attachment Theory and Religion: Childhood Attachments, Religious Beliefs, and Conversion, *Journal for the Scientific Study of Religion*, 29(3), pp. 315-334, 1990; Kirkpatrick, L.A., An Attachment-Theory Approach to the Psychology of Religion, *International Journal for the Psychology of Religion* 2(1), pp. 3-28, 1992 参照)。
- (9) Granqvist, P., Ivarsson T., Broberg, A. G., and Hagekull, B., Examining Relations Among Attachment, Religiosity, and New Age Spirituality Using the Adult Attachment Interview, *Developmental Psychology*, 43(3), 2007, p.590. しかし, これとは別に, 愛着理論と進化心理学の融合を勧める L.A.カークパトリックは, その重要な著書のなかで, 「宗教」をまとまった一体というよりも複数の異なる信仰的・実践的体系の集大成として考えるべきであると主張しており, 一般に「宗教」として見なされるもののすべての

形態を捉える定義は不可能であるとして、その定義を控えている(Kirkpatrick, op.cit.,2005)。

- (10) Kirkpatrick, op.cit., 2005, p.126.
- (11) Kirkpatrick, op.cit., 2005 など。
- (12) Granqvist, P. et al., Experimental Findings on God as an Attachment Figure: Normative Processes and Moderating Effects on Internal Working Models, *Journal of Personality and Social Psychology*, Online first publication, doi:10.1037/a0029344, 2012.
- (13) たとえば, Kirkpatrick, L.A., God as a Substitute Attachment Figure: A Longitudinal Study of Adult Attachment Style and Religious Change in College Students, *Personality and Social Psychology Bulletin* 24(9), 1998, pp.961-973 参照。
- (14) Granqvist and Kirkpatrick, op.cit. 2008, p.908.
- (15) Kirkpatrick, op.cit. 1998; Kirkpatrick, L.A., An attachment theory approach to the psychology of religion. In Spilka, B. and D. N. McIntosh (eds.). *The Psychology of Religion* (pp. 114-133), Boulder: Westview, 1997.
- (16) Cicirelli, V. G., God as the Ultimate Attachment Figure for Older Adults, *Attachment and Human Development*, 6, 2004, pp. 371-388.
- (17) Kirkpatrick, op.cit., 2005, Granqvist and Kirkpatrick, op.cit., 2008 など。
- (18) Kirkpatrick, op.cit., 2005, p.75.
- (19) Kirkpatrick, op.cit., 2005 など。この姿勢は、たとえば、グランクヴィストとカークパトリックの共著において明確に記される。「・・・我々は愛着理論が宗教の包括的な理論であると主張しない。そうではなく、我々が主張したいのは、愛着が、特にキリスト教において、個人の信念や神との関係及び表象の背景にある中心的なプロセスであるということである。」(Granqvist, P and Kirkpatrick, L.A., Attachment and Religious Representations and Behavior. In J. Cassidy and P. R. Shaver (eds.) *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications*, pp.906-933. New York: The Guilford Press., 2008, p.928) .
- (20) Granqvist et al., op. cit. 2007; Granqvist, P., Fransson, M. and Hagekull, B., Disorganized Attachment, Absorption and New Age Spirituality: a Mediational Model, *Attachment and Human Development*, 11(4), 2009, pp. 385-403 など。
- (21) 例えば, Kirkpatrick, L. A. and Rowatt, W. C., Two Dimensions of Attachment to God and Their Relation to Affect, Religiosity, and Personal Constructs, *Journal for the Scientific Study of Religion*, 41(4), 2002, pp. 637-651 参照。
- (22) Kirkpatrick, op. cit., 2005 参照。
- (23) Granqvist, P. and Kirkpatrick, L. A., Religious conversion and perceived childhood attachment: A meta-analysis, *International Journal for the Psychology of Religion*, 14(4), 2004, pp.223-250; Granqvist and Kirkpatrick, op.cit. 2008, p.916 など。
- (24) Granqvist P. and Hagekull, B., Religiosity, adult attachment, and why “singles” are more religious, *International Journal for the Psychology of Religion*, 10, 2000, pp. 111-123.

- (25) Granqvist P. and Hagekull, B., Longitudinal predictions of religious change in adolescence: Contributions from the interaction of attachment and relationship status, *Journal of Social and Personal Relationships*, 20, 2003, pp. 793-817.
- (26) Kirkpatrick, op. cit., 2005 など。
- (27) Granqvist and Kirkpatrick, op.cit., 2008.
- (28) Kirkpatrick, L. A. and Shaver, P. R., An attachment theoretical approach to romantic love and religious belief, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 1992, pp. 266-275.
- (29) ibid. p.909.
- (30) Kirkpatrick, op.cit., 2005, p.68.
- (31) Granqvist and Kirkpatrick, op.cit. 2008, p.919.
- (32) Granqvist et al., op.cit., 2007; Granqvist and Kirkpatrick, op.cit. 2008; Granqvist, Fransson and Hagekull op.cit., 2009.
- (33) Granqvist, Fransson and Hagekull, op.cit., 2009, pp.397-398.
- (34) Kirkpatrick, op.cit., 2005, p.2, 187.
- (35) Bowlby, op.cit.,1998/1980.
- (36) Bowlby, op.cit.,1973.
- (37) Bowlby, op.cit.,1998/1980, p. 132.
- (38) ibid., p.136.
- (39) Mikulincer, M., Florian, V., and G. Hirschberger, The Existential Function of Close Relationships: Introducing Death into the Science of Love, *Personality and Social Psychology Review*, 7(1), 2003, p.25 参照。
- (40) たとえば, Kirkpatrick, op.cit., 2005, pp.64-65 参照。
- (41) Granqvist and Kirkpatrick, op.cit., 2008, p.911.
- (42) Mikulincer, M., Florian, V. and R. Tolmacz, Attachment Styles and Fear of Personal Death: A Case Study of Affect Regulation, *Journal of Personality and Social Psychology*, 58(2), pp.273-280.
- (43) Mikulincer, M., Florian, V., and G. Hirschberger, The Anxiety-Buffering Function of Close Relationships: Evidence That Relationship Commitment Acts as a Terror Management Mechanism, *Journal of Personality and Social Psychology*, 82(4), 2002, pp. 527-542; Mikulincer, M., Florian, V., and G. Hirschberger, op.cit., 2003, pp.20-40 など。
- (44) Mikulincer, M. and V. Florian. Exploring individual differences in reactions to mortality salience – Does attachment style regulate terror management mechanisms? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 2000, pp. 260-273; Mikulincer, M., Florian, V., Birnbaum, G. and S. Malishkevich. The Death Anxiety-buffering Function of Close Relationships: Exploring the Effects of Separation Reminders on Death-thought Accessibility, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 2002, pp. 287-299.; Mikulincer, M., Florian, V., and G. Hirschberger, op.cit., 2002 及び 2003; Mikulincer, M., Florian, V. and Hirschberger, G. The Terror of Death and the Quest for Love: An Existential Perspective on Close Relationship. In Greenberg, J., Koole, S. L. and Pyszczynski, T. (eds.), *Handbook of Experiential Existential Psychology*, New

- York, London: Guilford Press, 2004; Hart, J., Shaver, P. R, and J. L. Goldenberg. Attachment, Self-Esteem, Worldviews, and Terror Management: Evidence for a Tripartite Security System, *Journal of Personality and Social Psychology*, 88(6), 2005, pp. 999-1013 など。
- (45) Wulf, D. M., How Attached Should We Be to Attachment Theory? *International Journal for the Psychology of Religion*, 16(1), 2006, pp. 29-36.
- (46) Kirkpatrick, op.cit., 2005; Granqvist and Kirkpatrick, op.cit., 2008。たとえばカークパトリックは、「幅が広く、十分な議論の深さをもつとはいえ、愛着理論は決して心理の「包括的な」理論ではない。故に、宗教の包括的な理論の候補にも成りがたい」(p.20), また「人格化された神々を持たない信仰体系が、愛着理論に多くの豊かな事例を提供することは疑わしい」(p.97)と述べながら、「キリスト教以外の、神の存在を想定するどの宗教の神々も、愛着によって理解し得ると推論することは理にかなっていると思う。」(p.92), 「(前略)愛着理論はキリスト教の神像に限らず、より広範囲で宗教を説明できると考える(後略)」(p.90)などと記している (Kirkpatrick, op.cit., 2005)。
- (47) Granqvist and Kirkpatrick, op. cit., 2008, p. 927; Granqvist, P., Mikulincer, M., Gewirtz, V., and P. R. Shaver, Experimental Findings on God as Attachment Figure: Normative Processes and Moderating Effects of Internal Working Models, *Journal of Personality and Social Psychology*, DOI: 10.1037/a0029344, 2012, p.3.
- (48) Kirkpatrick, op.cit., 2005, p. 147.
- (49) Kirkpatrick and Shaver 1992, Rowatt and Kirkpatrick 2002, Kirkpatrick 2005, Granqvist and Kirkpatrick 2008.
- (50) Granqvist and Kirkpatrick, op. cit., 2008, p. 923.
- (51) Ano, C.G. and Vasconcelles, E.B., Religious Coping and Psychological Adjustment to Stress: A meta-Analysis, *Journal of Clinical Psychology*, 61, 2005, pp. 1-20; Edmondson, D., Park, C. L., Chaudoir, S. R. and J. H. Wortmann, Death without God: Religious Struggle, Death Concerns, and Depression in the Terminally III, *Psychological Science*, 19(8), 2008, pp. 754-758 など。
- (52) Pargament et al., Religious Struggle as a Predictor of Mortality among Medically Ill Elderly Patients: A Two-Year Longitudinal Study, *Archives of Internal Medicine*, 161, 2001, pp. 1881-1885.
- (53) Kirkpatrick, op.cit., 2005.
- (54) 例えば, Kirkpatrick, op.cit., 2005, pp.71-72; Granqvist and Kirkpatrick, op.cit., 2008, p. 912.
- (55) Kirkpatrick and Shaver, op. cit.,1992; Kirkpatrick and Rowatt, op. cit., 2002.
- (56) Granqvist and Kirkpatrick, op. cit., 2008, pp. 908-909.
- (57) *ibid.*, p. 907.
- (58) Kirkpatrick, op.cit.,2005, p. 81.
- (59) *ibid.*, pp. 75-76.
- (60) Kirkpatrick and Rowatt, op.cit., 2002, p. 639.
- (61) Kirkpatrick and Shaver, op.cit.,1990, p. 317.
- (62) Kirkpatrick, op. cit., 2005, p. 81, pp. 241-243 参照。
- (63) *ibid.*, p.26.

Death and Religion in Psychological Theory: The Attachment Theory of Religion

Ilja MUSULIN

Attachment Theory (AT) is an extremely influential psychological theory of development and personality and in the past two decades scholars working within this theoretical framework have made a significant contribution to the study of religion.

This paper examines their notion of religion and the way they view the meaning and importance of attitudes towards death for the formation and maintenance of religious beliefs.

The paper first gives an outline of the AT and its application to religion, and then examines how death has been linked to religiosity in this theoretical approach. Finally, the author offers a critique of the concept of religion in this theory, its scope and its limited approach to attitudes towards death.

The author concludes that Attachment Theory of religion in its attempt to portray gods as ideal attachment figures overtly relies on contemporary Christian images of a loving and caring god and excessively emphasizes the anxiety buffering function of religion, thereby failing to fully capitalize on its potential and provide an effective explanation for the existence of other religious concepts and relationships and the anxiety-provoking aspect of religious belief. The paper also concludes that AT's approach to death, which centers on separation anxiety, bereavement and coping with loss, although very valuable, does not seem to be helpful in terms of explaining religious images of the dead as angry, threatening and evil, or simply passive.